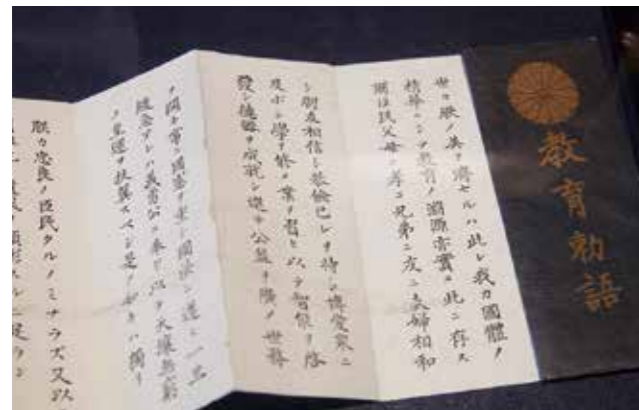


全てを攻撃しました。電車や自動車、人をめがけて撃ち、大変な土煙が上がりました。とても怖かったです。その時声をかけてくれた少年は標準語だったため、関西の子ではなかったと思いますが、その子はわたしの命の恩人です。

### 小学生の思い出

当時は毎月8日に学校から集団で近所のお宮さんに「戦勝祈願」に行く行事がありました。「勝ちますように。」と、みんなで祈りすることが学校の行事として組み込まれていました。

始業式も今のものとはちがい「教育勅語」というものを校長先生が読んでいました。難しい文章だったため、理解している児童は少なかったと思いますが、その間は頭をきちんと下げて、気を付けをして聞いていました。学校生活の楽しい思い出というのは少ないです。



「教育勅語」 提供：ピースおおさか



「中本町必勝祈願の写真」 提供：岡倉三郎さん

### 終戦の日の朝

朝から「正午に重大な放送があります。みな聞くように。」という放送がラジオで流れました。昭和20年8月15日は非常に天気の良い日だったことが印象深く残っています。

前日までは昼夜関係なくサイレンや飛行機の音がしていましたが、8月15日の朝は音がない世界でした。飛行機の飛んでいない、空襲警報・警戒警報のサイレンも鳴らない、世の中にこんな静けさがあるということその時生まれて初めて知りました。

正午にラジオ放送が流れましたが、内容が難しく子どものわたしには理解できませんでした。父に「戦争に負けた。」と教えられました。先の不安はありましたが、その反面、空襲警報がないことに安心を覚えました。それまでに相当なストレスがかかっていたと思います。その時のことを後に両親に聞くと、「あの時はホッとした。」と言っていました。

### 戦死した兄

わたしには11才上の兄がいて、東京の大学に通っていました。その兄に、「学徒出陣」で召集礼状が届きました。当時の大学生は「文化系」「理科系」「医学系」に分かれていましたが、「文化系」の学生は4年生まで大学に通えず、3・4年生は戦争へ行く時代でした。



「召集令状の資料」 提供：ピースおおさか

兄が召集されるより前は、日本で訓練を行ってから戦場へ行っていましたが、兄が召集されるころには、召集から1週間程で戦地へ行っていました。そして兄はそのまま帰ってくることはありませんでした。後で聞いた話では「戦病死」ということでした。兵隊と



「当時の岡倉さん」(左から3番目) 提供：岡倉三郎さん

### 戦争を知らない世代へのメッセージ



して戦い弾に当たって死亡したわけではありません。衛生状況も非常に悪く、薬も充分にない場所でしたから、中国だけではなく南の島々でも、飢えや病気で亡くなられた兵隊の方がたくさんいたそうです。

### 姉が話してくれた忘れられない爆撃の日の光景

当時、勤労奉仕に出ていた姉が爆撃のために電車が使えず、歩いて家まで帰ってきたことがありました。その時のことを戦後わたしに話してくれました。爆撃の衝撃で目が飛び出して、その目玉を持ってウロウロしていた小さい子がいたそうです。戦争中はみんな自分のことに精一杯です。姉はその時のことを思い出して「あの子、どうしたんやろう。戦後大人になってるかな。」と気にしていました。とてもショックだったと思います。

平和を維持するということはとても難しいことだと思います。「平和」と口で言うだけでは平和にはならない、ということを知っていただきたいです。

世界情勢へ目を向けるとわかると思いますが、平和のあり方についてみなさんにしっかりと考えていただかないといけません。日本国内だけの問題ではないのです。例えば災害救助で活躍されている自衛隊は大変素晴らしいことだと思います。しかし、平和のためには何をしなければならないかを自覚していなければ、このような災害救助以外で自衛隊という組織が動かなければならない事態が起こるかもしれないということを、深く考えてください。

今回お話をさせていただきましたが、みなさん熱心に聞いてくださいました。将来、今回のことを役立てていただけたら嬉しいですね。若い人たちにこれからがんばっていただきたいです。